

令和7年度 校内研究について

1 研究主題

(1) 研究主題・副主題

主題

自ら課題を見付け、協働して解決していこうとする児童の育成

副主題 一めあてを達成するための適切な話型を活用して授業改善を図る

(2) 主題設定の理由

本校はこれまで、『自ら課題を見付け、友達と協力して解決していこうとする児童の育成』を主題にし、令和5年度は算数科を中心に、令和6年度は更に様々な教科において主題に迫る研究を行ってきた。その成果により、指導の基本である授業の流れ、板書の構成や書き方、ノート指導などを校内で揃えることができ、児童にとって分かりやすい授業を行えるようになった。また、言語環境を整えるために導入した「話型カード」は、算数科で児童が自分の考えを友達に伝える場面で活用する以外でも、問題を解く際のヒントとしても活用するのに有効であることが分かった。この話型カードは、算数科の様々な単元や場面で活用できるように作成したものであったが、国語科など他教科において児童が考えを説明する際にも、一部活用されてきた。その結果、児童は自分の考えを分かりやすく適切に友達に伝えることができるようになり、「友達と協力して解決していく」姿が多く見られるようになった。

また、教師が情報機器の利活用、プログラミング教育の研究を積み重ねるとともに、児童が情報機器を適切・安全に使いこなすことができるデジタル・シティズンシップ教育などの推進により、情報活用能力の育成を系統的に行ってきた。

そこで、今年度は他教科で活用できる話型カードの開発、話型カードを提示するタイミング、提示の仕方などをICTの利活用方法も含めて研究していこうと考え、本研究主題・副主題を設定した。今後も、児童一人一人のよい点や可能性を大切に、異なる考え方が組み合わせ、よりよい学びを生み出す「協働的な学び」を推進していきたいと考える。

めざす児童像

- ・友達に分かりやすく伝えたり、友達の考えを受け止めたりして、学びを深め合う子
- ・学んだことを日常の生活や他教科に活用しようとする子

研究の仮説

教師が自らの指導方法や学習計画を振り返り、学習活動を工夫したり、めあてを達成するための適切な話型を活用したりすることで、授業改善や教師の授業力向上を図ることができれば、協働的な学びの場を実現し、自ら課題を見付け、協働して解決していこうとする児童の育成を目指すことができるであろう。

(3) 研究の視点

上記の研究を具現化するために、次の3つの視点を設定する。

視点1 主体的・対話的で深い学びを実現するための言語環境の整備・言語活動の充実

言語は児童の学習活動を支える重要な役割を果たすものであり、言語能力は全ての教科における資質・能力の育成や学習の基盤となるものである。児童の言語活動は、児童の言語環境によって影響を受けることが大きいので、学校生活全体における言語環境を望ましい状態に整えておくことが大切である。各学年の発達段階や各教科において適切な表現を用いて自分の考えを表したり、伝えたりすることは、事象をより簡潔・明瞭・的確に表現することにつながる。さらに、論理的に考えを進めたり、新たな事象に気付いたりすることにつながる。これまでの研究の成果として、①言語活動を充実させるためには、ハンドサインや話型カードが有効であること②主体的・対話的で深い学びの実現のためには、板書の工夫や『学びの掲示板』（既習事項を掲示したコーナー）が有効であることが挙げられる。話型カードは、令和5年度に算数科の研究を行った際、全学年で各単元・各時間において教師が児童の実態に合わせ、活動の前に全体に提示したり、ヒントカードとして個別に提示したりして活用してきた。また、令和6年度の研究では、タブレットを発表用のツールとして使用する際は、紙に印刷した話し合いの進め方カードを配布することが有効であることが分かった。

今年度は、言語活動の充実のために、

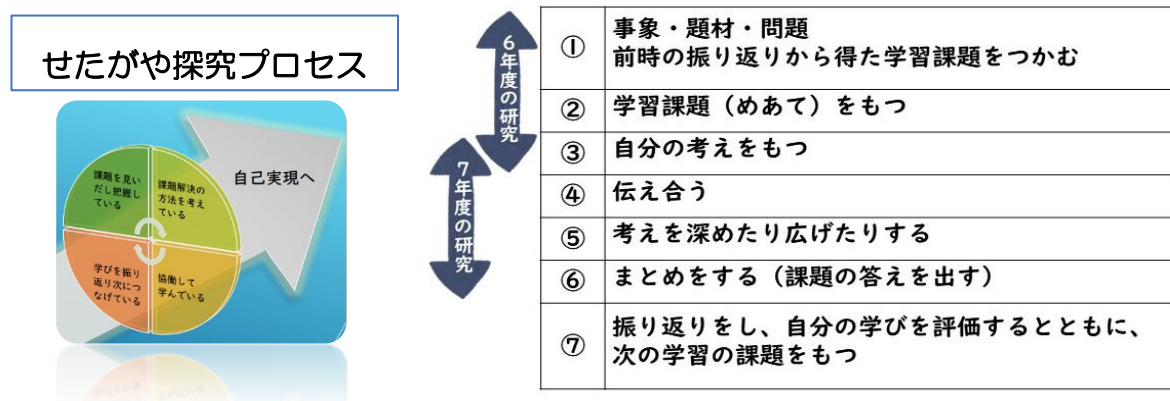
- ①算数科以外の教科でも活用できる話型カードを開発・作成・活用する。
- ②児童がいつでも活用できるように、ロイロノートの資料箱に話型カードや話し合いの進め方カード等を常置する。
- ③友達の意見に対して自分の意見を表したり、発言をつないだりするために、全学年でハンドサインを活用する。
- ④板書の工夫や『学びの掲示板』（既習事項を掲示したコーナー）を継続する。
- ⑤「間違えても大丈夫」と互いのよさを認め合えるような温かな人間関係を育む。

ことを大切にして、授業改善を図る。

【全校で取り組むこと：話型カード等、ハンドサインの掲示、学びの掲示板】

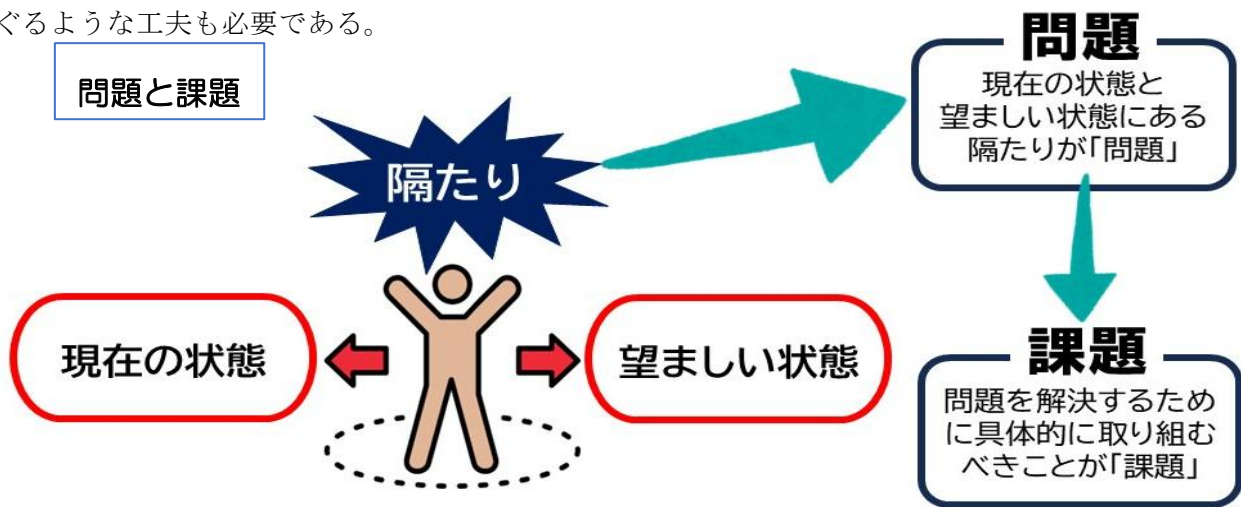
視点2 協働的な学びの充実に向けた学習活動の工夫

昨年度は、『せたがや探究的な学び』探究プロセスにおける「プロセス4：学びを振り返り、次につなげる」から始める振り返りを踏まえた単元計画を組んできた。そのサイクルにより、児童自身の振り返りが次時の学びに直結し、より学習意欲をかきたてられていた。今年度は、「プロセス3：協働して学んでいる」に重点をおいて研究を進めていく。



ICTの利活用により、児童一人一人が自分のペースを大事にしながら「個別」に学ぶことができる。さらに、児童が交流しながら、協力して作成・編集などを行う活動や、多様な意見を共有しつつ合意形成を図る活動など、「協働的」な学びを発展させることができる。また、協働的な学びで他者からの視点を受けて、自分の学びが深まっていくこともある。そうした学びの深まりを促すため学習形態や題材、発表の仕方など、協働的な学びの充実に向けた学習活動の工夫をしていく。

また、主題にあるように児童が主体的に問いや疑問を見出し、課題を設定するためには、「なんだろう」「やってみたい」「楽しそう」と思うような導入の工夫が大切である。例えば、教師の発問で、身近な日常生活や児童の興味関心があるものから具体物を提示するなどして、児童の知的好奇心をくすぐるような工夫も必要である。



熊本大学大学院教育学研究科 前田康裕先生の資料より

視点3 情報機器 (ICT) の効果的な利活用

学校教育の基盤的なツールとして情報機器を利活用することで、個々の特性にあった多様な方法で児童が学習を進め、多様な人たちと協働しながら学習を行うことが容易になった。学習を行う際、情報機器はそれ自体が目的ではなく、手段である。教師は、どの過程で、どのように、情報機器を利活用するのが効果的であるかを工夫する必要がある。

これまでの研究の成果として、教師が配布したロイロノートのワークシートの活用が挙げられる。構成や配色を單元ごとに固定化するなど視覚的にも工夫を凝らすことで、児童にとって分かりやすいものとなった。その他、学年間でワークシートの共有をしたり、教師間でも授業改善のための情報の共有をしたりするなど、校内で授業時間意外にも活用してきている。

また、児童は自分の考えや調べたことをまとめたり、発表したりする際、ロイロノートを積極的に活用している。文章を簡潔にまとめたり、画像や動画など視覚的に分かりやくまとめたりと、思考を整理することができる。自分の考えを説明する児童にとっても、聞く児童にとっても分かりやすく、友達との比較がしやすいものとなった。そのため、発表の際は発表者の考えがしっかりと受け手に伝わっている。今年度も、そうした機器の利活用の方法を探っていく。

(4) 研究の進め方・主な内容

- ①昨年度同様、教師個人の研究課題『めざす自分像』を設定する。年度初めに、ロイロノート（共有ノート）にテーマや手立て、方法などを1枚のシートに記入し、校内で共有する。年度末に個人の研究報告ができるように、テーマに関する資料（板書、児童のノート、活動の様子が分かる画像など）をポートフォリオ形式で作成していく。
- ②低・中・高学年・専科で分科会を作り、年度内に1回ずつ授業研究に取り組む。研究のテーマに則り、内容や研究の視点を考慮した課題解決的な授業を行い、分科会提案をする。
- ③各研究授業は、講師を学識経験者や指導主事、他校の教師に依頼し、複数回指導を受ける。指導案検討、事前授業は、分科会ごとに行う。約3週間前に研究推進委員会で、最終的な検討を行い、管理職に確認してもらう。分科会提案を指導案に添付し、2週間前までに指導案を講師に送る。
- ④各学期に行う管理職の授業観察(自己申告)は、互いの学びの場として教師間でも見合う。事前にC4thでアナウンスし、指導略案を添付する。参観後は、感想や質問などを伝える。また、それ以外の時間も、積極的に授業を見合い、指導力の向上に努める。
- ⑤1年間の研究を振り返り、その成果や課題も含めて研究収録にまとめる。

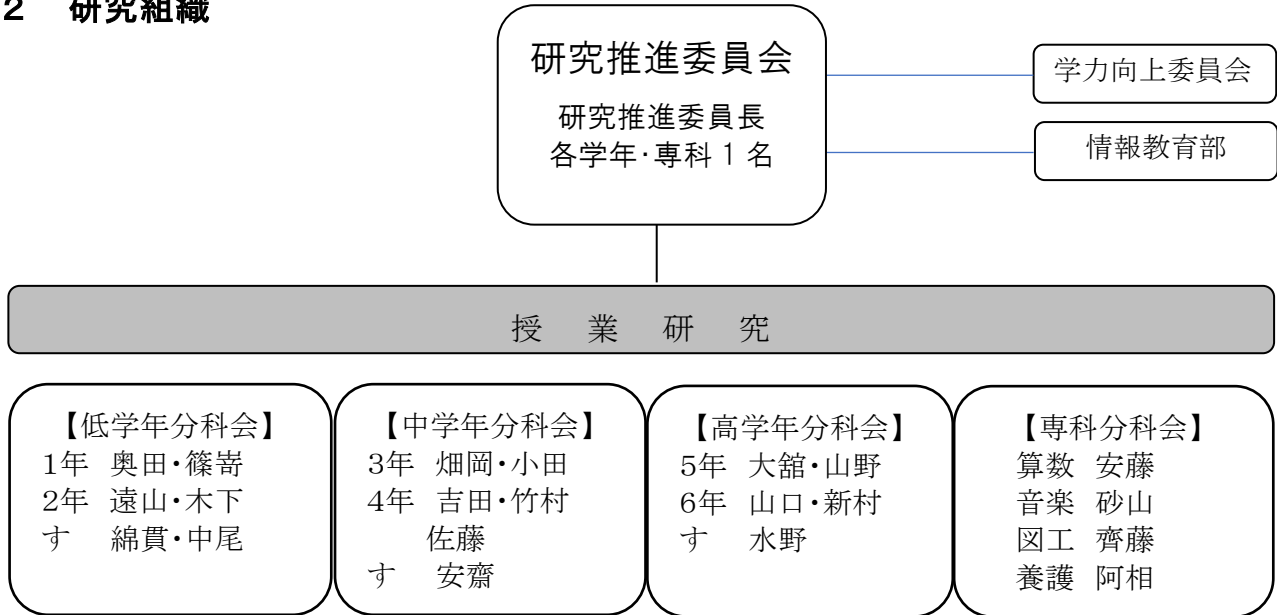
収録内容

…各分科会の提案・指導案・講師の指導講評と資料・1年間の成果と課題など

⑥放送室・事務室前の掲示板に、研究の取り組みを分かりやすくまとめて、ポスターを掲示し、保護者や来校者に向け、本校の研究の取り組みを発信する。

⑦「Apple teacher」を取得し、教師のスキルアップを目指す。

2 研究組織



※□…研推メンバー、す…すまいる職員

※すまいるの教員は、担当児童のいる学年に所属する。

※算数少人数は、必要に応じて研究授業の分科会をサポートする。

研究推進委員会の役割

- ・研究構想図(全体計画)の作成 (研究推進委員長)
- ・校内研究の年間計画の作成 (研究推進委員長)
- ・校内研究予算案の作成・執行 (研究推進委員長)
- ・研究授業(計4回)の企画・運営・指導案検討 (各回担当分科会)
- ・研究授業協議会の企画・運営 (各回担当分科会)
- ・教職員への広報「研推だより」(齊藤・竹村・山野)
- ・保護者への広報：学校ホームページ (新村・山野・篠寄・吉田) 学校だより (研究推進委員長)
- ・校内研修・OJT研修の企画・運営 (新村・安藤・吉田・篠寄・遠山)
- ・学び舎研究推進 (畑岡・遠山)

